

明治五年『方言の記録』（在、白馬村）の検討

大橋 敦夫

はじめに

近世期の方言資料は、近現代のものに比べると、十分に鑑入れがなされていない。資料自体の数が限られてしまうのは、時間の経過等により致し方のないことである。が、市町村誌等に紹介されている資料や、博物館等に保存されている文書などの中には、当時の方言を考究するうえで役立つものがある。本稿では、管見にふれた範囲ながら、近世から近代初頭期の信州方言とそれに関連する資料を取り上げ、今後の調査・研究課題を考究することとする。

一・資料の紹介——『方言の記録』

（『白馬村誌』の例）——

まず、白馬村に存在する資料から検討したい。長野県北安曇郡白馬村の村誌である『村誌（三）・社会環境編 下 白馬の歩み』（長野県白馬村 平成一五年三月）には、「14方言と共通語」という項目があり、白馬村の方言について概説している（五〇五～五〇六頁）。その中に、写真とともに紹介されている資料が、本稿で取り上げる『方言の記録』である（執筆担当者：田中欣一氏）。写真下のキャプションには、「方言の記録」という題に続けて、「あちゃ・そんなら・おけつちや……」などとある。明治五年（一八七二）にこんな記録を残してくれた人がいた。

とあり、変体仮名を中心に、墨で書きつけられた写本の第1丁・

オが示されている。

資料の所在を田中欣一氏に問い合わせたところ、現物のコピーをご提供いただいた。以下に、翻字し、分析を試みることにする。

二、資料の翻刻

もともと題名のない資料であるため、村誌の表現を尊重し、便宜『方言の記録』と呼ぶこととする。

■明治五年『方言の記録』（在、白馬村）の書誌

大きさ…二五・四×一七・五cm

体裁…和装、仮綴じ

分量…三丁か？

墨書、無界、五行

〔1丁・オ〕

明治五申年六月下旬

あちや、そんなら、おえつちや

ななやれ、のんだり、くつたり

ひつたり、たれたり、きつと

ちやつと、やつと、むゑつと

ねぼけて、すべつて、のめつと

〔1丁・ウ〕

いう、いふ、ろう、ろふ、ほふ

にふ、へやう、びやう、しやう

とふ、どう、ちう、ぢふ、てふ

りう、りやう、ぬふ、なう、おふ

わう、わふ、わしや、かう

〔2丁・オ〕

ゆふ、よう、たつしや、れふ

りやう、そふ、そう、ぐつと

ずつと、ゐつて、おふ、くう

くわと、くわん、ぐわん、やう

やふ、まふ、けふ、ふう、こふ

〔2丁・ウ〕

とつくり、ぎつくり、やつたり

とつたり、やつと、まつと、しや

べり、おつしやり、ちつと、もつと

ふつき、はんじやう、さつはり
あらあらかきしるしはんぬ

〔3丁・ウ〕

ハハハツト、ホホホツト、ヘエ、ハイ、ヤア、スリヤ
ヲヤ、ナニ、ナント、イヤ、サア

へイ音次郎でござい 御きげんよろしう
ヲヤ音さん よくお出だサア是ヲ御らん

三、言語の検討

① 語彙

1丁・オウ2丁・ウにかけて、七二語の単語が書きつけられていた。その後は、終末にかけて、文と掛け声が五行分ある。「方言の記録」という（仮）題名から、俚言の列挙かと期待してみると、予想に反した語が並ぶ。オノマトベや、同音の仮名の書き分けを組み合わせたものが中心である。通覧すると、「ちょぼくれ」のようなおかしみもあるが、後に成稿を期しての心覚えのように見える。

② 語法

収録語の中で、目をひくのは、「ななやれ」（1丁・オ）である。「するな。禁止の意」をあらわす語で、『万葉集』にも登場する禁止表現「なーそ」に連なる例である。現在も、生きて使われているかは今後の調査に俟つ。白馬地域での本格的な方言調査が望まれる。

③ 構成——資料の性格

前述のように、心覚え的な内容で、定義にもよるが、「方言」と言えば言えるが、他の資料との組み合わせ活用で、より価値を高めることになると思われる。

四、今後の課題

① 資料性の検討

「過去に記された方言の記録資料に基づく研究」について、大橋勝男氏は、次のように指摘されている。

この研究においては、そのような資料の探索そのことが、大きな仕事となる。その資料を用いる場合には、それがどの方言のどのような階層の方言を記したものが、記した人間、ならびにその記述意図、時代、記録資料の成立の事

情、表記、記述法等々について、資料的意義・価値をよく吟味して利用する。

藤原与一監修『方言研究ハンドブック』和泉書院
一九八四・四（一四〇頁）

今回は、現物にあたることができず、コピーのみによる考察であるので、所蔵者と目される田中欣一氏の続けてのご協力を得て、資料の来歴・周辺情報等の確認に努めたい。

② 長野県内に「在る」、このほかの資料（近世～近代初頭）の発掘・顕現化

『方言の記録』以外にも、今後、注視したい資料として、次のものがある。

a 『信國異言辨惑』……『南佐久郡誌 方言編』一九九六・五

すでに、『南佐久郡誌 方言編』（一九九六・五）で、以下のよう
に紹介されているものである（解説一〇四頁、図版七八五頁）。

「国風」と号する人の撰による信州の方言集である。跋文
に「宝暦六丙子年林鐘（六月のこと）十有七日 田口隠
士運英写之 行年五十有七（後略）」とある。宝暦六年
（一七五六）といえは小林一茶（一七六三―一八二七）の
生年よりも、七年早い年である。この信國異言辨惑は、一

茶の『方言雑集』と同趣の内容で、特に、佐久・小県一帯
の方言が掲げられているのが特徴である。撰者の「国風」は、
この冊子の序によれば「信州長久保駅」が生国であると記
されているが略伝すらわかっていない。また跋文にある「田
口隠士運英」という人についても同様である。

三葉掲げられた図版からは、「△常平（トロピヤウ） ▲不断ヲ
云 常平等（トコシナヘビヤウトウ）ト云コト也」などの興味深
い記述が見られる。

ぜひ現物が見たいと、執筆者、編纂関係者に問い合わせたが、
所在不明とのことで、探査が止まっている。改めて、江湖に問う
次第である。

b 武田喜伝治『俚言抄』一八七五・四 私家版

昭和五〇年代に、北佐久教育会によって活字翻刻されているが、
今や、その翻刻版も目にするのが稀になっている。現物のコピー
と翻刻版、ともどもに閲覧できるのは、市立小諸図書館において
のみである。

また、佐久地方の方言研究文献として、

今井昌夫「佐久地方言の一考察」『丘上』4

（望月高女校友会誌）一九三三

は、タイトルのみが知られるが、後継の望月高等学校にも本誌が無く、参照したい状態になっている。

佐久地方の方言研究の隆盛を祈念して、まずは、『俚言抄』の翻刻版を再度作成し、これを起爆剤として、『信國異言辨或』の原本発見、『丘上』4の披見につなげていきたい。

c 『鹿兒嶋言葉わらひの種』（長野市真田宝物館蔵）

信州方言を取り扱ったものではないが、松代藩第十代藩主の奥方が作成した鹿兒島方言の資料である。本資料については、本学学生高見沢陽子氏が翻字を行っている（平成四年度・国文科卒業研究論文）。また、すでに次のような研究論文もある。

山本 淳 「真田宝物館蔵書『鹿兒嶋言葉わらひの種』共通

語訳文の性格」『山形県立米沢女子短期大学紀

要』44 二〇〇八・一二 17 p

山本 淳 「真田宝物館所蔵『鹿兒嶋言葉わらひの種』と鹿

兒島方言音韻表記例の検討を中心に」『米沢国

語国文』27 二〇〇八・三 7 p

以上の成果をふまえ、さらに研究をふかめ、信州ゆかりの資料として、一書にまとめてみたい。

d 『見聞集録』（翻字は、青木美智男監修『近世信濃庶民生活誌』ゆまに書房所収）

文政九（一八二六）年から三年間、信濃国埴科郡森村で名主をつとめた中条唯七郎弼明の筆になる随筆である。

そのうち、「オランダ流火術が松代に伝来（二九二条）」には、忠兵衛君の師ハ、伊豆ノいら山の御代官井川太郎左衛門といふ方也

という一文がある。天保一三（一八四二）年、松代藩士の金児忠兵衛が、洋式砲術を習うために、佐久間象山らとともに江川太郎左衛門のところへ入門したことを伝える内容である。

注目すべきは、江川太郎左衛門の「江川（えがわ）」が「井川（いがわ）」と表記されているところ。「い」と「え」の混同は、北信の方言の特徴の一つだが、文書に記録されているのは、貴重である。また、「川」に濁点を打っており、濁音であることを明示しているのも興味を引く。

古文書を活用した信州方言の研究には、先例として、馬瀬良雄氏「チョーマ——「千曲川」の方言」（同氏『信州のことば——

21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社二〇〇三）がある。が、あとに続く研究が少ない。近世期の文書類の裾野は広いので、郷土資料の丹念な読み込みを重ねていくことで、用例を増やしてい

たいものである。

最後に、探査が完了し、資料紹介の段になった場合、これからはデジタル化も視野に入れるべきであろう。

【参考文献】

G A O (内川雅夫) 『白馬の方言となまり こんじよなま
で』私家版二〇〇六・八

〔謝辞〕 資料の解説・翻字にあたっては、本学・宮田暉朗教
授のお力をお借りしました。御礼申し上げます。